



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ボナヴェントゥラにおける神学と哲学の関係について
Author(s)	三原, 武夫; Mihara, T
Citation	基督教学, 13, 96-104
Issue Date	1978-09-14
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46370
Type	journal article
File Information	13_96-104.pdf



ボナヴェントゥラにおける神学と

哲学の關係について

三 原 武 夫

十三世紀後半、西歐世界にはじめてアリストテレスの学説の全貌が紹介され、一躍脚光を浴びるに至るが、この進出に際して、従来支配的地位を誇ったプラトン・アウグスチヌス主義の伝統を固守する立場から、反動的に対決の姿勢を示したのは、おもにフランシスカンの学者たちであった。

中世スコラ学の主要テーマないし課題をなす理性と信仰の關係をめぐって、アウグスチヌスの「照明説」を忠実に踏襲する彼らは、古代の哲学が示した真理も神の照明 (Illuminatio divina) の結果にはかならず、したがって、それは神の全体的啓示の一部であるとの見解に立って、信仰 (神学) と理性 (哲学) の二つの領域をまったく合一的なものと考えていた。彼らは、哲学を神学に対する予備的従属關係にあるものとみなし、その独自の學的価値をあえて認めようとしなかったのである。

さらにこれに関連して、この学派に共通するも一つの特徴は、彼らが、本質的に善を真理の上位に、意志を理性の上位におく主意主義者であった点である。彼らにとつて、理性の対象としての真理は、ただそれが実現すべき善の何たるかを証明するかぎりにおいて価値あるもの、と考えられた。とくに、最高善としての神へ至るには、理性的思弁の方法よりも、善なる意志と愛のはたらきによる魂の活動によらねばならぬ、というのがその基本的立場であった。

おおよそ以上のような立場を標榜するフランシスカン学派にあって、十三世紀のアウグスチヌス主義陣営を代表する重要な役割を果たし、学殖の豊かさと信仰の深さにおいて、對抗学派ドミニコ会の巨匠トマス・アキナスと並び称

せられたのは、イタリアのヴィテルボ生まれの神学者、フランシスコ会士ボナヴェントゥラその人である。彼が、經驗的事象の認識は知識 (scientia) によるが、神的照明によって到達可能な永遠不変のイデア界の直観は英知 (sapientia) のはたらきによる、と主張するとき、その学的立場は、アリストテレス主義に傾斜するドミニコ会のそれとは根本的に異なるものであり、フランシスコ会伝統の直観的、神秘主義的解釈の立場を忠実に踏襲するものであったといえる。理性を信仰に従属せしめると共に、一方で概念的推理の弁証法と神秘主義との結合を積極的に図らんとしたところに、ボナヴェントゥラの思想の独創的な面目がうかがわれるが、それはある意味で、プラトン弁証法の終局的方向を示すものであったともいえよう。

以下の小論で私は、十三世紀の思想史的背景を負うボナヴェントゥラにおいて、その思想を一貫する学の精神とはいかなる性質のものであるか、とくに哲学的批判主義と神学的信仰という相容れざる関係―理性と信仰の問題がいかに理解されたかについて、若干の素描を試みたいと思う。

ボナヴェントゥラの学説は、その全著作の書目が示すとおり、中世スコラ学が取り扱ったほとんどあらゆる分野―思弁神学、実践神学、神秘神学、聖書解釈、説教等―にわたって展開されるが、それらを一貫する中心的思想は、彼が所属したフランシスコ会⁽¹⁾の伝統精神、すなわち、徹底した清貧と万物に対する普遍的愛を介しての神への全幅的な愛の情熱にもとづくものといえよう。しかもそれは、信仰に盲従する狂熱とか愛にただ陶醉する単純情緒的なものとおよそ異なり、純粋な秩序ある精神の感受性から論理的に展開されるといった性格のものである。彼がアウグスティヌスの教説に終始傾倒し、これをさらに発展させることに執心したそもその理由は、両者の精神的共鳴によるところ大であるが、何にもまして、キリスト(神)との愛の一致において実現されるべき至福 (Beatitudo) への熱望に由来するとみなければなるまい。彼の学説において哲学が語られるにしても、その哲学とは、みずからの信仰対象を全幅的

に享受しようとする魂の欲求から発するものであり、その目指すところは、たんなる真理の観照ではなく、認識を通じて終局的には無限の愛（神）のうちに憩い、そこに喜び生きるという宗教的実践的なものであった。このことは、哲学と神学とがその方法によって区別されながら、相互に有機的に連続し補い合つて、共にわれわれを究極者へと導く、いわば車の両輪のごとくに理解されねばならぬことを示唆するものである。

ボナヴェントゥラのこうした思惟態度は、教会的ドグマと伝統にひたすら忠実な、ある意味では保守反動一点張りのかたくなな思想家といったイメージをもたらすかも知れない。しかしこの見方は早計というべきで、彼がアウグスチヌスや恩師ヘールスのアレクサンダーの足跡に随いながらも、時代の新説の中から古い伝統を補いうるものを見出し、積極的に摂取利用することに努力したことは、否定しえないところである。⁽²⁾「私が意図するところは、新説に異を唱えることではなく、共通の是認⁽³⁾されたものを再考しようとするところである」(Non enim intendo novas opiniones adversare, sed communes et approbatas retexere)⁽⁴⁾という彼の言葉は、新旧両思想を公平無私の見地から、より高次の綜合へ止揚せんとする彼の意図を雄弁に語るものといえよう。実践理性（意志）の優位を主張するボナヴェントゥラはつねに理論の凝固を避け、事態を具体的内面的に理解することに細心の注意を払う。たとえば、相反する意見が相互の間に、もしくは信仰的教条とくいちがひ調和不能とみられるばあいには、おのおのの意見が内蔵する真理の箇所のみを見出すことに努め、不正確な表現については、その欠点の由来するところを見究めた上で、そこに正当な意味を付与するという、まことに客観的公平な姿勢を示すのである。⁽⁴⁾ こうした思考の態度は、彼の名著「命題集註解」(Commentaria Sententiarum)に一貫して反映しており、近代の批判主義精神にも一脈相通するものが感じられるのである。

ボナヴェントゥラにおける認識論的思惟を、心理的発生的な起源問題に限ってみるとき、その認識は経験世界に由来する感覚的多様に始まり、その多様の世界に投影される形跡(vestigium)を通じて、魂の内奥に神の似像(imago

Dei)を求め、最後に被造界を超越する神秘的觀照の境地、いわゆる「魂の頂上」(apex mentis)において完結する階梯上昇的な弁証法の過程である。

このいわば知的巡礼の道を最も鮮明に描き出してみせてくれるのが、彼の神秘主義的小篇「神をめざす魂の遍歴」(Itinerarium mentis in Deum)であって、そこにわれわれは、宗教的実存に立脚して究極者なる神を追求してやまぬ彼の体験的把握の意志と、下級の世界から出発して抽象の道程を経ながら、ついに至上善の直観的認識にいつさいの希求の成就をみようとすする独特の思惟の展開を見るのである。要約すれば、それは、人は「いかにして世界の事物を介して神に向い、神秘的合一に到達できるか」の道を教えるものであるが、こうした思惟の展開は、方法論的にみれば、彼が私淑してやまぬアウグスチヌスの内面的な哲学の道そのままに踏襲し祖述したものと見える。だがしかし、たんにそこにとどまるものでなく、むしろプラトン主義とアリストテレス主義の中道を住かんとする独創的な彼みずからの哲学があるとみなければなるまい。

ボナヴェントウラの教説の真髓を以上のごときものとみるならば、われわれが仮りにボナヴェントウラの「哲学」を語りうるにしても、それは現代の哲学概念とは余程異なる性格のものであることを知らねばなるまい。もともと彼の本領は、哲学者であるよりは、愛における神との一致を思慕してやまぬ永遠の求道者たらんとするところにある、近代的意味の完結した哲学体系を彼の教説に期待することは、それこそ「木に椅って魚を求むる」のたぐいというべきであろう。彼において哲学的思惟を跡づけることができるにしても、それは、彼の広汎な著述活動の全領域にわたって種々異なる、大部分神学上の諸問題の開陳に際して、人を超自然の認識へと導く方法的手段として用いられたもの、と解すべきである。

あらゆるものを通じて神を愛すること、この愛があつてこそ、哲学的思惟の活動も価値を帯びてくる。そして、愛によつて信じる者は、その信仰に確たる根拠をもちたいと希う。その哲学とは決して現象世界の觀照に終わるべきも

のでなく、經驗的事象よりその永遠の根拠へと昇り行く道程 *in via* における知的認識を意味するものである。かのアンセルムスの「知解せんがため信す」(*Credo ut intelligam*)という有名な定式にしてから、じつはボナヴェントゥラの哲学概念を根本的に特徴づけるものであると同時に、彼の教説においてこそその全き価値と意義を有するに至ったともいえるのである。

知的認識としての哲学が、一方では人間の内的要求に根ざす實在の概念に動かされながら、しかもそれが被造界を超越する絶対者(神)との関係において考えられるとき、そこに自然対超自然の非連続的關係を有機的につなぐ契機はいったいどのように理解せられるかが問題となる。すなわち理性と信仰、哲学と神学の有機的関連は、ボナヴェントゥラにおいてどのように考えられ、説かれたか。

ボナヴェントゥラにとって終生変らざる確信は、哲学が真に哲学としての使命を果しうるためには、自然の創造主たる神を指し、つねにこれに倚らねばならぬ、したがって、人間理性が誤謬の淵より救い出され、確実な真理の道に至るには、それは啓示の光に熱らされねばならぬ、ということであった。理性はみずからの固有の機能を有する限り、自然的認識に関して哲学することはもとより可能であるが、しかしそこにとどまることに満足せず、さらに歩を進めて信仰の力とその扶けのもとに、自力のみでは理解し難い超自然へと開眼されねばならない、と。

しかしこうした考え方に対しては、哲学を神学ないし神秘主義と混淆してははからぬもの、「神学の婢」なる哲学という古色蒼然たるあの中世スコラ学の理念の典型的表現にほかならぬ、といった批難が投げかけられるであろう。

だが、こうした批難は、ボナヴェントゥラの所説にそのまま該当するであろうか。そもそもキリスト教は、現実の世界を自然と超自然との錯綜から成るもの、自然界の創造主の無条件な意志によって超自然に必然的に関連づけられたもの、という根本理念の上に立つ。この世界観を生きて体験するボナヴェントゥラにとっては、自然を超自然から切りはなして考えることは、およそ無意味であるばかりでなく、ひとたび信仰によって實在そのものの啓示を受け

れた以上、実在は認識されうるものというよりは、信いじらるべきものという帰結を、いやおうなく肯定せざるをえないことなのである。彼にあって信いずることは、真理認識を真に可能にする決定的な意味をもつ。そこに、本性的に超自然的秩序を志向する人間の理解をめぐっての啓示なき哲学の無能力、理性の独力にのみ依存してひたすら形相の世界、意味の世界、現象の世界の論理的必然性を求めながら、しかもますます実在との接触から遠ざかって、破綻と困窮にさまよう観念主義形而上学の行く手が示唆されるのである。

十三世紀の支配的思想であったアリストテレスの受容に関して、ボナヴェントゥラの姿勢をどう評価するかについては、現代の中世史諸家の間でもかなり意見の対立がみられるが、⁽⁶⁾しかしアリストテレスの先知主義の影響は、本来の主意主義者ボナヴェントゥラにおいてもかなりのものといえる。だがそれにしても、彼が知性に対する意志の優位を主張してやまなかつたのはなぜだろうか。理由は明らかである。要するに、神と人間との間に究極的な愛の関係を成就せるといふキリスト教の主眼とするところを、最も熱烈に実践躬行したアンジの聖フランシスコ以来の伝統が、彼の魂のうちに息づいていたからにはかならない。この愛の秩序を無視して、ただ人間の自覚的存在のみを究極、独立なものとして主張し、啓示と恩寵における共同の営みとは無縁にとどまろうとするところに、すべての自然哲学と道徳の破綻とつまづきがくりかえされてきた。こうした見解に立つとき、彼は主意主義たらざるをえない。そしてこの態度がさらに普延されるとき、神との愛の一致は、たんなる概念的合理的認識を越える信仰的權威によらざるを得ない、との結論に導かれる。すなわち、哲学がわれわれを至福ならしめる神の認識への努力であるかぎり、そこに至る道は独り旅ではなく、認識は理性と共に実践の伴侶を欠くことができない。そしてこの旅が荒野の彷徨にみずからを失うことのないためには、認識においては啓示が、実践においては恩寵の光が魂の案内者として必然的に要請される。それは決して自然的秩序の無視ではなく、本来の目的以上の目的へ向っての挙揚といふべきである。真理認識において信仰を拒否することは、彼にとって、認識への道を断念し、必然的に誤謬の方向をたどることにほかならない。

愛の聖者フランシスコにおける自他融合の理想を、その教説において再現しようとするボナヴェントゥラの胸中に高鳴る愛の鼓動と内省の深さは、彼の哲学をして一片の抽象主義に終わらしめず、しかも他方、秩序整然たるその論理整合性は、情緒的な面をも曖昧模糊とした神秘主義の危険からつれもどすのである。この世の哲学は真理の方向を指示しえても、みずからを導いてそこに至らしめることはできない。哲学的思索の道をいかに行きつくしても、行く手にわれわれを待つものは依然として果てしない思惟の連続であり、立ちどまって全き世界の展望に心を新たにしようである。究極の境地は、近寄るにしたがってかえって遠ざかるかに見える地平線のごとき目標にすぎない。この事実を生きて体験する者は、自然的秩序に立って思惟する形而上学はそれ自身いかに自主独立であろうと、真に形而上学としての資格を得んがためには、すでになんらかの形で宗教を前提することを予見せざるをえない。哲学的思惟は、よしんば認識の世界において絶対的実在に出会いえたにしても、それ自身に身を委ねるかぎりには、その中に全き解決を見出ださうるものではなく、ただ信仰によって神との共同の生をたのしむという高所より見渡すとき、はじめて所期の目的を成就することができる。^(?)

この一見飛躍的な弁証法の道は、自然と超自然とを木に竹をつぐような機械的關係においてとらえんとするものではなく、真理認識の目標を神の享受、(Fruition Dei)と解するとともに、その目標はかえってあらゆる発展的存在の根底に横たわる根源的原理であると考ええるボナヴェントゥラにとっては、きわめて自明にして自然な方向であったといえる。

以上まことに大ざっぱであるが、ボナヴェントゥラにおける哲学と神学の關係について、その基本的な点に考察を加えてみた。彼の著作に接すると、そこには絶対の世界を洞見しうるあざやかな獨創的認識と、いっさいの知識の有限性相対性に対する深い反省の姿勢が随所にうかがわれる。絶対者を要請してやまぬ人間の思惟は、たとい有限的相対的であろうとも、いっさいの存在の原型としての神的イデーにつながることによって、感覺的經驗世界に関する

客観性と妥当性を保証しうるのみならず、進んでそこに世界を超越する「存在そのもの」に関して成立する形而上学も合法化されることになるのである。被造世界にあって永遠なるものを希求し、それとの関わりにおいて世界の存在、本質、秩序を理解しようとすることは、カントが考えたような、人間の越権ではなく、むしろわれわれ人間に許された知恵である、その知恵は、認識に媒介されたわれわれの不完全な愛が、真理の本源にして至上の善なる神の愛へと昇華するとき、全き完成をみるのである。

人間理性は、みずからにおける神の親しき現存や慰めにみちた内なる声を通じて神に至り、その「永遠の根拠」(rationes aeternas)において確実な認識を得、至上の愛に想うことができる、とするボナヴェントゥラの教説は、超自然的秩序と自然的秩序との有機的関連を肯定した上で、はじめて理解されうることである。こうした考え方は、二つの秩序の断絶を既定の常識と受けとめてはばからぬ現代の合理主義的精神には、神秘的空想にみちた中世のたわ言としか映らないかも知れぬ。しかし、生きた信仰体験にもとづいて、事態をつねに具体的に、より深い基礎から確立しようとするボナヴェントゥラにとっては、この思弁こそアウグスチヌス以来のキリスト教世界観と全く合致するところの、統一的な知恵の言葉を語る「キリスト教哲学」⁽⁸⁾そのものにほかならないのである。われわれはこれを、たんなる古典的思想の一典型としてではなく、むしろ方向を喪失してさまざま近代自律主義精神の在り方を反省し、これを正しき方向へと照らす大いなる知恵の遺産として理解すべきであろう。

註

- (1) アンジの聖フランシスコによって創設された托鉢修道団体。正式には「小さき兄弟の会」(Ordo Fratrum Minorum, 略して O. F. M.) と称ばれる。福音書に示されるイエスの貧しき生活の道を理想とし、その福音を実践躬行したフランシスコ自身は、学術一般についてはほとんど関心をもたず、むしろ否定的でさえあったが、彼の死後、この会はその目的達成のため学問の重要性を認めはじめ、短日月の間に多くの学者を輩出せしめ、間もなくドミニコ会と並んで、十三世紀の学界をリードする団体となった。若き

日內的苦惱から一切の所有を投げうち、十字架を負うてイエスに従った聖マレンシヨの愛と歓喜にみちた生涯は、この会の理想となり、その哲学・神学的立場の上にもつねに反映している。

- (2) この拙考を傍証するものとして、『タマラキ版「聖ボラヤセントウラ全集」(St. Bonaventurae Opera Omnia, edita studio et cura PP. Collegii St. Bonaventurae 10 voll, et indices, Quaracchi), 1882-1902. の第十卷に集録された諸教父引用目録(Index locorum SS. Patrum)を参照。この『プリマトテニスよりの引用カ所』は、アウグスチヌスを除けば、他のどの教父よりも多数であることがわかる。

(3) II Sententiarum, prooemium.

- (4) “Propterea intelligendum est quod omnes modi praedicti aliquid veritatis in se continent et omnibus his elicitur una veritas integra”, II Sent. d. 13, a. 3, q. 2, concl.

- (5) “Esio quod homo habeat scientiam naturalem et metaphysicam, quae se extendit ad substantias summas, et ibi deveniat homo, ut ibi *quiescat*; hoc est *impossible quin cadat in errorem nisi sit adiutus lumine fidei*, scil. ut credat homo Deum Trinitatem et unum, potentissimum et optimum secundum ultimam influentiam bonitatis Si aliter credas, insanis circa Deum... Igitur ista scientia praecipitavit et observavit philosophos, quia non habuerunt lumen fidei... *Philosophica scientia via est ad alias scientias, sed qui ibi vult stare cadit in tenebras*.” De donis Spiritus S., IV, 12. 坂口昂吉「晩年のボナヴェントウラとプリマトテニス哲学の關係」中世思想研究Ⅳ、一九六一年、参照。

- (7) “Hunc ordinem ignoraverunt philosophi, qui negligentes fidem et totaliter se fundantes in ratione, nullo modo pervenire potuerunt ad contemplationem”. Sermo IV de rebus theologicis, 15.

- (8) 「キリスト教哲学」と称せられるものが學として存在しうるかという問題について、今日でも種々異なる立場から論じられている。たしかに「キリスト教哲学」というとき、そこには宗教的、権威的、なものと同様に、学理的なものとの異質な二要素の結びつきが考えられる。むしろ啓示とか伝承とかは真理の基準、たりえないが、しかし哲学史上、神的啓示を外にして展開された多くの体系が紛糾と誤謬におちいったことを思うとき、神的啓示は少なくとも実質的には、真理の根源として認められねばならぬ。この意味で、神的啓示の何らかの影響を許容せんとする「キリスト教哲学」の成立は、歴史的にも権利的にも認められるべきである。ボナヴェントウラの哲学的態度はまさに、そのようなものであった。

E・ジルソン「中世哲学の精神」(服部英次郎訳)上、第一、第二章参照。